日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow

## 後世に残る輝きを、精魂込めて生み出す。

## 彫金師 小林 浩之 氏

### Hiroyuki Kobayashi

1980年滋賀県生まれ。祖父の代から錺金具に関わる家の長男として生まれるが、学生時代はサッカーに明け暮れる。イタリア留学を経て大学卒業後、現代の名工である父、小林正雄氏の下で研鑽を積む。

御殿引手

### 錺金具（かざりかなぐ）

魚々子

現存する世界最古の木造建築である法隆寺にも使われるなど、日本建築や神輿などを絢爛に装飾してきた金色の金具。桃山時代から江戸時代にかけて最盛期を迎え、装飾性が高く大型の物が数多くつくられた。

社寺の装飾などに用いられる錺金具。匠の技が生む錺金具は絢爛豪華な金色で、芳しいまでに日本の伝統建築を彩る。そして、その趣は数百年の時を経ても色褪せることはない。

小林浩之さんは、伊勢神宮や春日大社の錺金具を手掛けた父を師と仰ぐ、若き職人。幼いころから父の工房で遊び、鏨などの道具に触れながら育った。

### きっかけは？

**小林**「実はしばらくの間、家業への関心が薄らいでいた時期がありました。そんなころ留学先のイタリアで、職人たちが自国の文化を大切にしているのを目の当たりにし、家業の素晴らしさを強く感じたんです」

10年の修業を経て、その成果を試す仕事に挑んだ。それは、御殿引手という城や屋敷に設えられる襖の引手、そこには錺金具づくりの全てが集約されている。

まず、銅の地金を焼き鈍し、引手の形をとるのだが、その際、端に厚みを付けていく。金属が貴重だった時代の知恵で、わずかな金属でも重厚感を生み、豪華に見えるからだ。

いくつもの加工を施した後、炭で磨き、細かな凹凸を消すと地金はまばゆい輝きを放つ。それを金色に変えるのが水銀鍍金。表面に金箔を定着させる、古くからの技である。

鍍金を経て金色に輝く地金に文様を描いていく。大きな柄を描き終わると、さらにそれ以外の金箔を削り、魚々子という微細な文様を施す。先に描いた柄を引き立たせるためだが、作業としては一段と難しくなる。鏨の一打一打に全神経を注ぎ打ち込む。

仕上げに、特殊な溶液に浸して魚々子を施した部分の色を変え、金色の輝きを一層際立たせた後、他の部品と組み合わせてついに完成。修業の成果を示す出来映えを、小林さんはどう受け止めているのだろうか。

### 今後の抱負は？

**小林**「金箔の削り残しが幾つもあったりと、まだまだ甘いですね。これから遠回りしてでも着実に技を磨き、後世に残るような品をつくっていきたいと思います」

一打一打、父の背中に追いつくために鏨を打つ。それは決してたやすい道ではないが、いつの日か、錺金具のように輝く未来が待っているに違いない。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2015年1月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!

日本が誇る技の継承に挑む姿を動画でご紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する

**映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。**

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

**Web版**

パソコンやタブレットでもご覧になれます。
本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介しています。

アットホーム明日への扉 検索

**TV番組**

ディスカバリーチャンネル（CS）
冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

**ビジョン**

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 好評公開中

No.073／会津桐下駄職人　黒澤 孝弘 氏